

## 五 わらべうたと民俗芸能

### (一) わらべうた

わらべうたは、まりつき、お手玉、羽根つき、手遊び、縄とび、鬼遊びといった遊びのときにうたわれる歌から、子どもを遊ばせたり眠らせたりする子守歌、牛やからす、こうもりといった動物、また、子どもたちが主になつて行う年中行事のなかで歌いつがれてきたものである。ここでは代表的な歌をいくつか記しておく。

#### 1 遊戯歌

##### (1) 遊びのはじめ

へぜんじやら ほうじやら おちやらにまかせて そこいけホイ

遊びのはじめに順番を決めたり、鬼を決めたりするとき、最後の「ホイ」でジャンケンをする。

へひいふくれたおんみいさん 目エにやかからじ タンボがめ

ひゃーくで おみつが 二十

ジュズ玉、ネツゲエ(猫貝)、ギナンなどの数をかぞえるときにうたう。

##### (2) テマイ(てまり)歌

へからうめ からだけ からすが一匹 とんで渡わたいた

このお手まりや 誰だれにあげましょ

花のおさよさんに あげましょ

ハイハイ よう受けとりました

一人が手まりをつき、みんなで「誰にあげましょ」までうたい、次につかせたい人の名を「花の○○さんに、あげましょ」と、手まりを高くあげると、名ざしされた人は「よう受けとりました」とうけとつてつきはじめる。

へ坊ぼさん 坊さん どこへ行く 私わはたんぼの稲刈りに

私も一緒に つれしやんせ お前まへがくると じゃまになる

このがいがい坊主 くさ坊主 後の勝負は誰しよ

へ坊さん 坊さん なぜ泣くの 親もおらずに子もおらず

たった一人の 坊さんが 山からこつそりおりてきて

信玄袋にお豆がござる 人がちよいと見てちよいとかくす

へ人も通らぬ山道に 桜の花が咲きみだれ 一枝折るまに 日が暮れた

伯父おんじいさんがて泊ぼまろうか 伯母おんばいさんがて泊ぼまろうか

ふとんは短し夜は長し とんころりん ひんころりん(ちんからん とんからん)

お手玉歌としてもうたわれた。

へ一つひよどり 二つふくろ 三つみみづく 四つよたか 五ついささぎ  
 六つむく鳥 七つなぎさの浜千鳥 八つ山鳥 九つこまどり 十はとんびのいささぎとんびのしよ  
 へ一つ一枝梅の花 二つふっくり福寿草 三つ見事な桃の花 四つ吉野の桜花  
 五つ色々ヒヤシンス 六つ紫かきつばた 七つならんで月見草 八つやさしい女郎花 九つ九重菊の花 十  
 取りましょ花の種

へでこぼうや 帰ろうや もうかれころ 三時ごろ

家ではね たまちゃんかね 待ちこがれているんだよ

今朝ね 猫がね ねずみとつてしやういよ

へ山のからすはなぜ鳴くの 親もおらんば子もおらん

たった一人の坊さんが 山からころんで経よんで 今日七日がすんだら参りましょ

へ十をとのさん 二十仁比山山王さん 三十さかなや 四十宿題 五十五の川

六十六角さみだれ 七十七福神 八十博多の停車場 九十久留米の公園 百百寿草

(3) 羽根つき歌

へひい ふくれた おんみいさん

夜も昼も 頭巾かぶつて おむすび 十

へひい ふくれた おんみいさん

朝から晩まで かつちんかつちん おむすび 十

へ一つこい 二つこい 三つてこい 四つてこい 五つでも  
 六つかしい 七つこだ 八かましい 九らで十

(4) お手玉歌

へ一かけ 二かけ 三かけて 四かけて 五かけて 六かけて

橋のらんかん腰かけて はるかむこうをながむれば 十七 八の小娘が 片手に花もち 線香もち

お前はどこかと問うたれば 私は九州鹿児島 西郷の娘でございます

明治九年の戦争で 討死された西郷様 お墓参りもせにやならぬ

へ隣りのおばさん時計はいくじ 一時 二時 三時 四時 五時 六時 七時 八時 九時 十時 十二時 十

二時

(5) 手遊び歌

へせつせのせ

青山御所から東山見ればね 見ればね

門の外におさよさんと書いてある 書いてある

おさよ さしすせ水晶のくしをね くしをね

誰にもろたか 源次郎男にもろたかね

源次郎男はしゃれしゃれ困るね 困るね

そこで おさよさんは涙がほうろほうろ ほうろほうろ

ほろつく涙は たもとでふいたかね ふいたかね

ふいた着物は洗いませよ 洗いませよ

洗った着物はしほりませよ しほりませよ

しほった着物は干しませよ 干しませよ

干した着物はたたみませよ たたみませよ

たたんだ着物はなおしましよ なおしましよ

なおした着物はねずみが チュツ／＼

ねずみ ぼろ／＼ すっぱんぼんのぼん

へ一つひよこの豆の葉で たいらく／＼ 二つ舟には船頭さんが たいらく／＼(以下たいらく略)

三つみいちゃんのおもちやで 四つ横浜異人さんで

五つ医者さんのお薬箱 六つ昔のよろいか

七つ泣きべそ涙か 八つ屋敷のおじさんか

九つ乞食のお椀持ち 十を殿様お馬の上から

十一巡查さんサーベルさげて 十二兄さん新聞よみ

十三酒屋のさんまいさんが 十四島田のちよっこいまき

十五権兵衛が種まき 十六六社のお祭

二人が向きあい、手のひらを打ち合わせながらうたう。

へいちけんじよ 二けんじよ 三けんじよ 四けんじよ

しければ蛍のもぐらの上に けつぽい はつぽい はいまで通って でんでん車に 一寸けつてみしよ

指遊びをしなごうたう。

(6) 縄とび歌

へ波はごーごーと打ちよせて ここは海辺の山となる

青空高くそびえたち 錦の旗がたっている

へお花さんお入り 大蛇の尻のあつばかりきりき アツパツパ じゃんけんぽい

負けたお方は 出てちようだい

(7) 鬼遊び歌

へお月さん お月さん 星や なし出さつさん

十五夜さんから憎まれて そこで星や 出さつさん ナイザラ コーザラ(ナンヤラコーヤラ)

池の端のこうふくろ ころふくろ 後えおんもんな 誰いしよ チリン カラン ポテツ

(8) 外遊び歌

へうちのせんだんの木 せみがチイてなくよ ドンドン シャンシャン ドンシャンシャン

うちのくぐい戸は くぐいにつかくぐい戸 ドンドン シャンシャン ドンシャンシャン

うちのくぐい戸は くぐいよかくぐい戸 ドンドン シャンシャン ドンシャンシャン

二人で手を組みあわせ、高くかかげて、くぐり戸の格好をして、皆がその下を通る遊びで「くぐいにつかく

ぐい戸」のところでは、ぐい戸役はわざと手を上げ下げして邪魔をする。

へ下駄かくしィ かたらんもんなア 水仙ごんぼうかづらの葉

まあた ギッチョウ ノーカンセー

(9) 遊びのおわり

へカラスが鳴くから 帰ろう

モズが鳴くから 戻ろう

へ戻ろう 桃の葉 帰ろう柿の葉

夕方になり、遊びつかれ家に帰るときにうたった。

2 自然の歌

(1) 月

へお月さんないくつ 十三七つ 七つの年から 京にのぼって学問さした

七ちゃん 八ちゃん 源八ちゃん そういうちゃ くいやんな

儀工門さんな 油買いげ いーたいば 犬から追われて へーしなかけかごーで

屁はブツ ブツ ブツ ぶげんしゃ(金持)の子どんたちや 錦の巾着さげとらす

おどま 何いさぐつか 狸のきんたま 三つばかり ひっさげろ

へお月さんないくつ 十三七つ 七つの年から 京にのぼって学問さした

七ちゃん 八ちゃん 源八ちゃん そういうちゃ くいやんな

猿が餅つく だご屋のかかが お千どんと お万どんと 油買いげいーたて

犬から追われて へーしなかけかごうだ へーしから追われて 豆田のなかけかごうだ

豆からはじかれて 屁はブン ブン ブン

ぶげんしゃの子どんたちや あっぶーべんべん(美しい着物)きとらすバツテン

おどま 何い着つか つづいべんべん(つぎのあたった着物)着ろうだん

へお月さまえらいな くしのようになったり 鏡のようになったり

春夏秋冬 日本中を照らす

へお月さまいくつ 十三七つ 坊やの年は三つと三月

何のんで育った ラクトーゲンで育った 何のんで太った ラクトーゲンで太った

お月さまは丸い 坊やのように丸い まるいまるいまんまるい

3 動物・植物の歌

(1) 牛

へ牛もうにこめかましゅう アメガタ買うて ひっばらしゅう

牛あかか持たんタン 馬のかか借つとつタン 返えしやえじい泣きよらす

(2) からす

へからす小屋 つん燃えた

早ういたて 水かけろ

ひしゃくも桶も貸そうダン

へからすよー からすよー

なし田はつくらんか 田つくれば 足が汚れる

汚れるこんな 洗いやい 洗えば 寒か

寒かこんな あたいやい あたれば 熱か

熱かこんな ひざいやい(さがりなさい)

ひざれば 尻つく 立てば 頭つく

デーの上のからすは ギャーというて ちい死んだ

多少、詞が異なるが次のようにもうたわれていた。

へデーの上のカラサー鳥 なし 首がぐんにやい ひだるかけんが ぐんにやい

ひだるかこんな 田つくれ 田つくれば足が汚る

汚るっこんな洗へ 洗へば冷たか

冷たかこんな あたれ あたれば 熱か

熱かこんな ひざれ

ひざれば 尻しつつく 立てば 頭つく

デーの上のカラサー ギュツというて死んだ

(3) かいつぶり

へケーツグロ(キヤーツグロ)の頭に 火のちいた

プルツとすんだら(もぐると) つつ消えた

かいつぶり、または鳩たばといわれる水鳥で、喉のどや頸くびが赤く、動作がすばやいので、いかにも頭に火がついてあわ

てて水にもぐるように見えるのである。

(4) こーもり

へここうもりいじよ ここうもりいじよ

花のてんげ くるっぜ 一尺取つか 二尺取つか

三尺まーじゅー くりゅーだん

長い竹竿の先に、てぬぐいをつけて、ふりまわしながらうたった。

(5) どんぼ

へ石垣顔どんぼ顔つらだすな つらだすないば 釣りらるっぞ

カクレモヨウ(かくれんぼ)をするとき、鬼をけん制して、はやしたてた。

(6) 植 物

へ米いすい こうすい ころん ころん ころん

オバケタケジョ(おおばこ)の花茎を、二つに曲げ、相手のものと交差させ 互にすり引きあつて切れた方を

負とした。

#### 4 ことば遊び歌

##### (1) 数 え 歌

へ一の木 二の木 三の木 桜の枝に ひつちよんちようが止まった  
とんちゃんにいうてけえ とんちゃん鉄砲ドーン

##### (2) 尻 と り 歌

へ一角二角 三角四角 四角は豆腐 豆腐は白い 白いは兎 兎ははねる はねるはビッキ  
ビッキは青い 青いはバナナ バナナは長い 長いは煙突 煙突は黒い 黒いは印度人  
印度人は強い 強いは兵隊 兵隊はえらい えらいは大将  
へくじら らくだ だるま まつり りす すずめ めがね ねこ ことけい いす

#### 5 子 守 歌

##### (1) 眠 ら せ 歌

へおろろんの焼餅や 一枚で九つ 半分しちややられんたん  
負けてや いっちゃんさい いっちゃんさい  
へひつちよこ はつちよこ 蜂の巣

蜂や山さい巢つくいげ

巢はつくらじ 嫁ご見げ

嫁ごはどげな嫁ごかん

紅つけ かねつけ よか嫁ご

朝みたいば 化け嫁ご

はよ 寝えやい はよ 寝えやい

蜂は山へ巢をつくりにいっだが、巢はつくらずにお嫁さんを見にいっだ。お嫁さんは、口紅、おはぐろをつけ、きれいなお嫁さんだったが、朝見たらそうでもなかったという意味であろう。

のんびりした旋律が幼児の眠りをさそった。

##### (2) 遊 ば せ 歌

へちようし ちようし いんぼいぼい

たんぐい たんぐい ばあつけ

幼児の手のひらを、人差指でつつきながらあやした。

へつい目 さがい目 ぐるつともうて 猫の目

へこの子は いらん子 向うの岸さい ぼいやれー

いうこと聞かんもんな 堀の中さい なんこめ

佐賀まで行こでちや しょんしょこしょん

## (二) 子どもの遊び

### 1 男児の遊び

子どもたちの遊びはどこでもあった。野原やガタといった自然の中では、虫・魚・小鳥を相手に土・石・木・竹・草などを利用して自分で遊びを工夫した。また、雨の日や夜は室内での遊びをいろいろとつくりだした。

コマ コマ遊びはナゲゴマとカケゴマがあった。コマはザル市(旧八月十二日)で買い求めてケン(芯棒)を調節したりして自分のコマをつくった。

ナゲゴマは相手のコマにぶつけて倒すものでケンカゴマともいった。カケゴマは綱をケンにひっかけて、股をくぐらせたりに背中まわしたりする曲芸的な遊びである。

ベチャ 径五<sup>ツ</sup>ほどの丸型の厚紙に絵を描いた薄い紙をはったもので、四十七士・真田幸村・山中鹿之助などの武者ものや、元師や大将といった戦記ものなどがあった。

遊びには「振り」と「返し」がある。「振り」は、めいめいがニクイ(二枚)ずつ出して親がまとめて同じ向きに重ねて、それを振りあげると地面におちて起き(表がでる)たり、寝(裏がでる)たりする。次に起きたものばかりを集めて振りあげる。一枚起きるか、寝るかするとその持主が全部もらえる。みんな起きたりするとフー(ご破算)となりやり直すか、つぎの勝負にくりこす。

「ベチャ」は、相手のものへ打ちつけたときに起こる風力でひっくり返すものと、相手のベチャを敷いても勝ちとなった。「キイダメ」といって四角に枠を区切って、その枠内で返す遊びもある。新しいベチャは軽くて返されやすいので古いのや油をひいたりして工夫をした。

ネンボウ打ち ネンボウは柳や桑の木を五十<sup>ツ</sup>ほどに切って先を鋭く尖らしたもので、いろいろな太さや枝のついたものもつくった。

稲刈りがすんだ田は、ネンボウ打ちの恰好の場であった。ジャンケンで負けたものが、先に田土に打ちこんだネンボウに向けて、勢よく打ちこんで相手のネンボウを倒せば勝ちとなつて自分のものとなつた。季節風が吹き田の土が乾くとネンボウ打ちはできなくなる。

このネンボウ打ちは後に釘打ちに代わった。

トウバタ(タコ) 肥後の守(小刀)で竹ヒゴを削り、十文字に組み合わせ四つの頂点を木綿糸で結んで和紙をはって絵を描き、両側に紙の房をつけ安定して上がるように長い尾をつける。

「チャンカケ」は、ガラスを砕いて粉状にして飯粒を練りあわせ糸の上部に塗りつける。隣りのタコと競りあっているとき、チャンのかかっている部分へタコを急降下させて切りつける。

「ブンブントウバタ」といって、上部に鳴子をつけて風に鳴るようにしたトウバタもあった。

カツコ遊び 直径三<sup>ツ</sup>ぐらいのまっすぐな木を二十<sup>ツ</sup>と十<sup>ツ</sup>の大小二つに切り、小さな棒はいるぐらいの船底形の穴を掘って縁にたてかけ、先端を大きい方で叩くと跳ねるのをすばやく打って飛ばす。守っている方はそれをキャッチするといまままでの点数はゼロとなつた。捕りそこなうと落下点から穴めがけて投げる。これが入る

と点数はゼロになるが打者がこれを打ち返してもよい。

むずかしい方法としては、股の間に腕をさしこんで小さい棒の先端を叩いて跳ねあがると、すばやく腕を抜いて打ちとばす「ヨイツチャン」というのや、後向きに叩いて向きなおって打つという方法もあった。

コブ（クモ）のケンカ コブ同士をケンカさせて遊ぶもので、脚が赤く腹部が黄色がかかった緑色のアカコブで笹の葉に巣をつくっている。

カモジグサの茎を抜いて穂をしごいて斜めに土につき立て、まず一匹をのぼらせ、つづいて一匹をのぼらせて戦わせた。

草つき・輪かくし 馬の餌とする草刈りのあいまに子どもたちは刈りとった草を一つかみか二つかみ出しあつてうず高く積みあげ、笹の茎で丸く輪をつくり草の中にかくす。順番に小さな竹の棒で輪がかかれていそうな所を突いて、うまく輪の中にはいると積まれた草は全部自分のものとなった。

ガタ遊び 有明海のはげしい干満の差によってつくられたヒガタは、子どもたちの恰好の遊び場であった。コガニやワラスボなどヒガタの小動物たちも遊び相手であった。

川や江湖の傾斜しているヒガタにすべり台をつくり岸の高みから水ぎわまですべつて遊んだりした。ガタナゲ合戦は、二組に分かれて四、五人がはいるくらしいの深さ一メートルほどの穴を掘り、互いに隠れながらガタを投げあう。全身泥だらけになると水へ飛びこんで洗った。

アシノコラツバ 筑後川沿いに群生するアシの葉を大きく幾重にも巻き、野バラのトゲをつきさして葉を固定し笛をつくった。もの悲しい音をひびかせた。

おしべつとう・ぞうぐい 寒くなると日当たりのよい壁などによりかかって日向ぼっこをしていると誰いうとなしに「おしべつとう こうべつとう」と体のぶつつけあいをはじめ、そのうちに「ぞうぐいしゅい」となって、ぶつかりあいが激しくなり、ときにはケンカになることもあった。

## 2 女兒の遊び

お手玉 端切れを組み合わせて小さな袋をつくり、中に掘端に生えるジュズ玉や豆類を入れた。遊び方は、座ったままで親のお手玉をほうりあげ落ちてくるまでに下においておお手玉を集めたり替えたりした。また、両手や片手で三〜五個のお手玉をほうりあげあやつるもので個数がふえればむつかしくなった。いずれも歌（わらべ歌・お手玉歌参照）を唄いながらする。

オハジキ ジュズ玉やネツゲエ（ネコギヤ・ネコゲエ）という小さな巻貝を指先ではじき当てて取りあいをした。諸富ではオハジキといわず、ジュズ玉しゅい、ネツゲエしゅいといっていた。ジュズ玉やネツゲエのほか丸くて平たいガラス製のものや、餅を乾かして色を塗ったものなどもあった。

板の間や縁先で、めいめいが一定数をだしあつて板の間にふりまき、当てようとおもう二つのオハジキの間にも指を通して、通れば一方を指ではじいてもう一方に当てる。当たるとその一つは自分のものになった。

テマイ（てまり）つき テマイは綿や真綿を芯にして屑糸を幾重にも巻き、表面は美しい色糸で麻の葉型などの綾にして、よくはずむように鋸屑やオモトの実、リュウノヒゲの青い実を入れたり、また、つくときに音がでるように貝殻のなかに砂を入れて包みこんだりした。



弾力がなく、あまり高くあがらないので膝をついて低い姿勢で歌(わらべ歌・チマイ歌参照)にあわせてついた。後にゴムマリになって立つてつくようになり股をくぐらせるなどいろいろなつき方ができた。

チドリカケ(糸とい) 紐を輪にしたものを指にまわしてハシゴや鳥カゴなどいろいろな形をつくって遊ぶのも二人または一人で行う。紐は髪を結ぶ「シケ」紐で、太さも手ごろでやわらかく赤・青・緑・黒など美しい色があった。

羽根つき 正月、女の子は羽根つきをして遊んだ。羽子板は買ってきたが、羽根は手作りでキンキンムクロ(ムクロジの実)に小さな穴をあけて正月料理の鴨や鶏の羽毛を三枚または五枚はめて、つまようじなどをクサビにして抜けないようにしたもので息を吹きかけて回転数の多さを競った。

一人つきと二組に分かれてつきあう追い羽根があった。

フウズキ(ほおずき) ウミ(海) フウズキと植物のフウズキがあり、どちらも口に含んで唇のうえにのせ、うえの唇と歯でおさえて音をだした。蛙の声に似ているところから「晩にフウズキ鳴らすぎい、クチナワの寄つてく」などといわれた。

ウミフウズキはコウケエフウズキといい、コウケエ(てんぐにし)という巻貝が丸太や竹に産みつけた卵のうで、ゲンシキ網を流しているときにはいるもので振り売りの魚や駄菓子屋に塩水のはいつたドンブリに浸して売られていた。

植物のフウズキは庭先によく見られ盆花として使われるもので、六角形の赤い袋に包まれた丸くて赤い実を軟かくなるまで気長にもみほぐし、つけ根の芯につまようじやびん止めで穴をあけて中味をとり出すと透きとおった

赤いフウズキができた。

クニトイ(国取り) 地面に大きな円を描いて、中にうるこ型の波を全円に描く。手前の波型からオハジキのガラス玉をはじき、入るとその部分が自分の領地となった。線の上や飛びこしたりすると交替をする。

全部とり終わるとジャンケンをして勝った方が敵の領地を手のひらで描き円の部分が自分のものとなった。こうして領地の奪いあいをした。

### (三) 民俗芸能

佐賀県には、古くから祭りの場などに奉納されてきた芸能が各地にさまざまな形で伝承されており、なかでも浮立と呼ばれる芸能はほぼ全県にわたり分布している。

浮立とは「風流」の宛字で、いわゆる風流なものの意でみやびやかなもの、風情あるものの意にもちいられ、中世に「ふりゆう」と読まれ祭礼におけるきらびやかな練り物や採り物、さまざまな仮装や、あるいは囃子や歌を伴う踊りなどもさすようになった。

### 民俗芸能

佐賀には土地によってさまざまにくふうされた浮立がある。鳥栖・三養基地方には行列浮立・獅子舞・佐賀市郡には天衝舞浮立(玄蕃一流浮立)、杵島郡には太鼓浮立(皮浮立)・鉦浮立、鹿島・藤津地方には面浮立、武雄・伊万里市を中心とした舞浮立(踊浮立)などがあり、いずれも太鼓や鉦を打ち鳴らし豊作を祈り収穫を感謝するのである。

諸富町では山領と太田に天衝舞浮立(玄蕃一流浮立)、三重に獅子舞が残っているが、存続には多大の経費や多数の出入を要すなど、いろいろな問題をかかえており、今後の維持は困難をきわめるであろう。

## 1 三重の獅子舞

(1) 由 来

佐賀県重要無形文化財指定書(昭和三十九年五月二十三日 佐賀県教育委員会)によれば、『六百年前越後国から肥前の蓮池に伝わり、江戸時代鍋島氏が川副郷三重の川副代官に伝授させたものであると伝えられている』とあるが、現在、越後(新潟県)には同系統の獅子舞は伝承されてなく確かなものとはいえない。

(2) 奉納時期と場所

新北神社の秋の例祭十月十八・十九日(もとは九月十八・十九日)に奉納されるが、近年は神事の当番集落により一定しない。

神事後の後、お下り前に拝殿前で奉納してから当番集落(寺井津・搦・為重・徳富のいずれか)への神輿のお下りに従い、お旅所や道中の民家で適宜舞う。

また、昭和五十一年の佐賀国体や県郷土民芸大会などへも出場した。

(3) 役名と衣装

獅子舞の諸役は三重の青壮年があたり、約六〇名ほどになる。

奉行 二名 壮年

紋付に陣笠をかぶり、総取締りをする。

世話役 一〇名 青壮年

諸連絡をする。

どら(太鼓) 二名 青年

袴に笠をかぶり、白足袋で草履の緒は白紙・白布を巻く。

どらは薄手の太鼓で胸前に吊るして打つ。

鼓 二名 青年

衣装は、どらと同じ。最近はこの役はない。

笛 四〜一二名 青年

衣装はどらと同じ。笛は歌口を含めて一〇穴で、アシの紙というアシの茎の中にある薄い皮膜を第二穴に張り響くようにする。現在は立笛にかわる。

めづり 二名 青年

獅子をあやす役で、紋付に野袴、豆しぼりの後鉢巻、一尺ほどの小竹に赤青だんだらの色紙を巻き、両端に紙の房をつけた、めづり竹を二本ずつ持つ。

獅子使い 三二名 青年



獅子頭

雄、雌にそれぞれ一六名で、紺の法被にパッチ、法被の背に「獅子」の文字があり黄色の帯をする。  
獅子頭は幅三九<sup>セ</sup>、高さ四五<sup>セ</sup>、重さ七・六<sup>キ</sup>程度で、頸の部分は木製、他は和紙を重ねあわせ漆をかけて額には無数の細い紙垂しでを垂らす。雄は青緑色で口を開き、雌は赤褐色で口を閉じている。頭部の中には、「いさみ」といって鉄製の横棒に七つの銅製の環がはめてあり、頭部を強く振ると音がでる。

幌は「獅子の着物」といい、長さ約四・五<sup>尺</sup>、前部に垂らす前垂れは約一・八<sup>尺</sup>で、頭の色と同系色、ところどころに直径四<sup>セ</sup>ほどの白い綿玉がつけてあり、尾はイチブ（いちび・苧麻）の皮を細く裂いてつける。

他に名義旗一棹、高張提灯一对、手提灯一六張がつく。

(4) 次第

獅子舞の次第は「ひら」「二段つき」「三段つき」「獅子がぶり」「蚤取り」「めづり」で約二〇分間を要し、雌子は同一曲の反復で、三段つきでは他より急調子となる。

ひら 頭に一人、尾部に一人がはいり、頭を振りながら数歩前進交替をくり返す。

二段つき 頭部の獅子使いが肩車をして、尾部に一人の三人で舞う。

三段つき 肩車の上に更に一人乗り、倒れるのを防ぐため「前立ち」といって前で一人が、ささえ役をする。

獅子がぶり 飛ぶようにして、前進後退をはげしく三回く



三段つき

り返す。

蚤取り 「ひら」の動作を基本とし、雌獅子がまず三回まわり、反対より雄獅子が三回まわる。

めづり 獅子が遊びつかれて眠っているところへ、めづりが登場して、めづり竹を両手の三本指でくるくるとまわしながら舞う。これを四回くり返して五回目に獅子頭をめづり竹で打つと、獅子は眠りからさめて、「ひら」の動作にうつる。

(5) 特徴

獅子舞にはいくつかの系統があるが、三重の獅子舞に見えるスリルある曲技は散楽の影響をうけたものとおもわれる。

元来、獅子は霊獣と考えられ疫病や悪魔を祓うとされ獅子頭の紙垂をとってお守りにするなど霊力を期待する行為もみられる。

大きな特徴としては二段つき、三段つきにみられるような曲芸的な所作を行うことで、全国的にみれば梯子はしごのうえて舞ったり、肩車をしたりするものはあるが、三重にみられるような勇壮な獅子は稀であり、同系統の蓮池の獅子舞（佐賀市）も曲芸的な舞はみられなくなったので貴重な存在となった。

地区民の高齢化や若者の流出による後継者不足などから存続が危ぶまれていたが、とうとう昭和五十八年の奉納は中止されてしまった。一時は小、中学生を対象に指導も考えられていたので、何らかの法を講じて保存して



めづり

もらいたい。

## 2 山領浮立

### (1) 由来

佐賀市および佐賀郡を中心に伝承されている浮立で太鼓打ちのかぶる天衝てんつきという冠物から天衝舞浮立あるいは、創始者と伝えられる玄蕃の名をとって玄蕃一流浮立ともいう。伝承では掘江大明神(現掘江神社、佐賀市神野町)の雨乞祈願に神職の山本玄蕃が創り出したものといい、また一説には川副郷寺井津の住人玄蕃亮常利が創始したともいうが、いずれもはっきりしない。

### (2) 奉納場所

西の宮社(佐賀市北川副町)の秋の例祭十月二十日に、山領の当番である八年毎に奉納される。昭和五十一年に奉納された。

### (3) 役名と衣装

大太鼓 壮年一名

浮立の主役となるもので玄蕃一流と呼ばれ頭上てんつきに天衝と呼ばれる兜状の冠物をかぶり、腰にゴザを垂らす。冠物は直径二〇センチ、高さ一四〇センチぐらいの半月状で中央に日と龍が描かれている。大太鼓には後打がつく。



山領浮立

## 民俗芸能

笛 壮年 十名

羽織・着物にスゲ笠をかぶる。

鉦打ち 青年 二十五名

シャグマ(和紙を切り重ねたものの先端に色紙を切り飾る)をかぶり、アジシ(現在は消防服)を着る。鉦は嘉永年間(一八四八—一八五三)のものがあつたというが、戦時中に供出したので現在は太田・小松(佐賀市)より借用している。

モレイシ 少年 二十五名

女物の着物(古くは青着物)に色タスキをかけ、桃色のカサ張りかさぢりと花カゴをつけた笠をかぶり腰に締太鼓を吊るす。

他に御謡いがつく。

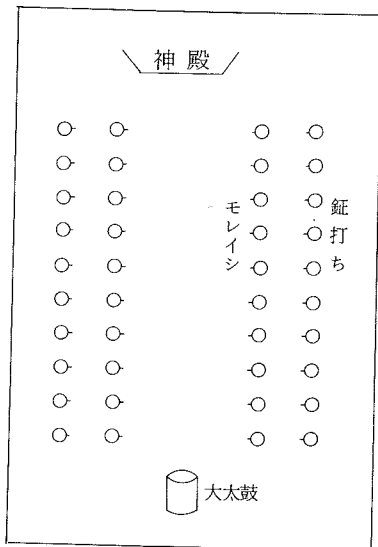
### (4) 次第

山領の氏神社六所大明神より打出しを行う。

道中は「道囃子」を囃しながら道行きをし西の宮社の鳥居から「入り込み」ではいり境内で図2のように場をととのえる。

神の前では「本囃子」と「まくい」をする。神事にあわせ神前で米と塩で祓いをし謡が三番はいる。神の

図2 境内での位置



前の奉納が終われば宮巡りを「まくい」で行う。他に花浮立として「佐賀の新宮さん」「高い山」「遊びにごんせ」などがある。

### 3 太田 浮立

(1) 由来

山領浮立と同系統であるが、伝承の経路は明らかでないが互いに影響しあっていたとおもわれる。創祀の時期を知る資料とはなりえないが、浮立に使用している太鼓に天正六年（一五七八）の墨書がある。おそらく当初は神事に使用していたものであろう。

(2) 奉納場所と時期

太田神社の秋の例祭十月十九日に五年毎に奉納される。

(3) 役名と衣装

太田・土師の集落の人々がこの役にあたる。

太鼓打 青壮年 数名

黒地の上衣にたっつけ袴。黒手甲をし白足袋に草鞋をはく。うち一人は鍬型の兜状の冠物をかぶり口を手拭で覆い、腰にゴザを垂らし、上衣の背に玄蕃一流の染抜きがある。

笛吹き 青壮年 数名



笛 吹 き

紋付に袴。笛は竹製。

鉦打ち 青年 二十五名

揃いの黒法被、黒股引に黒足袋草蛙ばきで、切紙の房をつけた笠をかぶる。法被の衿に太田神社浮立連中の染抜きがある。

モラシ打ち 少年 四十名

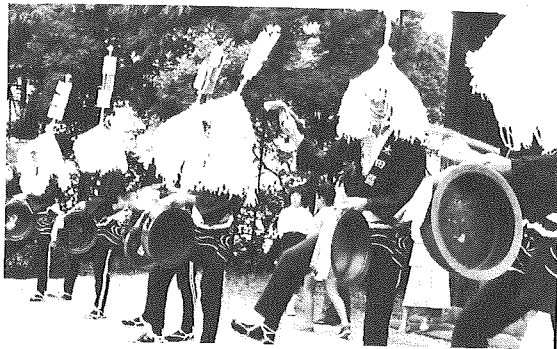
女物の着物に色襷をし花笠をかぶり、笠の囲りを色布で覆い顔の前だけをあける。青手甲、青脚絆、白足袋草蛙ばきで、腰にモラシ（締太鼓）を水平に吊るし、モラシの囲りを色布で覆う。

謡い手 壮年 数名

紋付袴

(4) 次第

神輿のお供として浮立が従う。道行きの順序は神輿を先頭にモラシ、笛吹き、太鼓、鉦打ちの順で「道行き」を囃しながら従う。



鉦 打 ち



モ ラ シ 打 ち

神社参道にはいると「長道行き」で神前まで進み、モラシが中央に二列に向かいあつて並び、その後には鉦打ちがひかえる。太鼓打ちは謡いにあわせて太鼓を打ち、謡いが終わると神前まで進み神の前の所作を行う。

花浮立を数番行つて「打ち込み」の囃子にあわせて神殿を巡つて終わる。

(5) 囃子と小謡い

囃子は「道行き」「神の前」「花浮立」「打込み」などで囃される。笛の音とあわせて記録しておく。

道行き

へトツピツタラヒョーピツタラヒョー トントコトソノスツトントソ

長道行き

へヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョー

ヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョー

ヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョー

ヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョー

ヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョー

神の前

○本囃子

へヒョーヒョーヒョーヒョー ヒョーヒョーヒョー

ヒョーヒョーヒョーヒョー ヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョー

ヒョーヒョーヒョーヒョーヒョー ヒョーヒョーヒョー

○マクイ

へリリリリリ リリリリリ

トトトトトヘイコー カーカイサー トトトトトヘイコーカーカイサー

トトトトトハイハイノーハイハイハイ ハイハイハイノーハイハイハイ

花浮立

○肥後の熊本

へヒョーヒョーヒョーヒョー

肥後の熊本長六橋からながむればトコヨイ 下は白川私の心はぢようしばや

ヒョーヒョーヒョーヒョー ヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョー

ヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョー

ばかり ヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョー

サマエサマエハンヤトツピーピーピーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョー



太鼓打ち

○高い山

ハハイヒョーヒャヒョーヒャー

高い山から谷底見ればの 爪やなすびの花盛りよ あれはよいよいまたどうしやんす

あの山にちらちら見ゆるは月か星か蛍か 月ならばおーがみあげましょ 蛍ならばお手にとる

ハンヤトツピーピーピーヒャイヒョーヒャヒョ ヒャヒョーヒャー

○七夕

ハハイヒャイヒョー ヒャイヒャイヒョー

ひとちーぢや父にはなれて ふたつぢや母にはーなれた チンマイコ チンマイコ チンチン

マイコマイコ オーチョーチョーガチョーイヤツサーオーチョライノホイ ヒャイヒャイヒョー ヒャイヒャ

イヒョー

ソンヂャーヤツサツサ テンテコテンノテンテン ヒョーヒョーヒャヒャヒョーヒャヒャヒョーヒャーヒョー

ヒョー

ヒョーヒョ ヒョーヒョーヒャヒャヒョーヒョーヒャヒャヒョーヒャヒャヒョーヒョー

○ヒョーヒャー

ハヒョーヒャヒョーヒヒョ

ヒョーヒャヒャヒョヒヒャ ヒョーヒャヒャヒョーヒャヒャヒョーヒャヒャヒョーヒャヒャヒョーヒャヒャヒョー

ヒャイヒャイヒョーヒャヒャーヒャヒョーヒャヒョーヒョーヒョヒャヒョヒョーヒョーヒョーヒャヒョーヒャヒョーヒョー

ヒョ

ハンヤ トツピーピーピーヒャイヒョ ヒャヒョヒャーヒャ

アーリヤ ヤツサーヤツサーヤツサツサー ヒャイヒャイヒャイノヒャイヒャヒョー ヒャイヒャ ヒョヒョー

ヒョ

打込み

ハヒョーヒョーヒョーヒョーヒョー ヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョー

ヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョー ヒョーヒョーヒョーヒョーヒョーヒョー (繰返し数回)

小謡い(浮立の折に配付された資料をそのまま記録したので、本来の謡本と一部異なることをおことわりしておく)。

ハ尚を悦びの盃は 尚を悦びの盃は かげを廻るや朝日かげ 伊豆の三島の神風も

吹き治む可き世の初め 行く久しきぞ限りなき

ハこなたの庭の姫小松 こなたの庭の姫小松 一の枝には金になる 二の枝には銀になる

三の枝には鶴がつく 下から亀がおどりたつ 鶴と亀との舞い遊び

ハ高砂や 高砂や 高砂や 高砂や 此の浦船に帆をあげて 月もろともに出でしをの

遠くなる海みの岬みすぎて 早や住之江に着きにけり

ハ庭のいさごは金銀の 庭のいさごは金銀の じゃこうの雪柄めのおのはし

池のみぎわの鶴亀は 宝来山もよそならず 君の恵みぞ有難き

へ現にや安楽世界より 現にや安楽世界より 今此の姿に 姿現して  
我れらが為の観世音 仰ぐもおろか守るなり

へ東をはるか見ながせば 東をはるか見ながせば 宝の船がはしりくる

白がねの帆柱に 綾と錦の帆をかけて ともに大黒なが恵比須 こなたのお家に走りこむ

へ海老どのや 海老どのや 海老どのや 海老どのや 幼少よりひげ長し 年もとらず腰まがる

腹には大きな浪をよせ あら目の出たや 御目出たや

へ永き命をくみてしる 永き命をくみてしる 心の底のくもりなき 月の柱の光そめ

朝夕なるる 玉の井の 深きちぎりをたのもしや

へ此の家は黄金垂木に ひわだぶき 此の家は黄金垂木に ひわだぶき 金の柱に銀の梁

戌亥の隅に瓶七つ 白金のまげ柄勺 黄金の桶に雲もよう

へ向うはるかに見ながせば 向うはるかに見ながせば 鳥かと思えば船である

積みたる荷物は米と酒 七福神のうわのりで こなたのお家にはしりこむ

へ御体は氏神の 御体は氏神の 神も明神ましませば 尚も氏子は栄えける

行く久しきぞ まもるらん

へ袖をつらねて行く末の 袖をつらねて行く末の 雲かと思えば八重一重 咲く九重の花盛り

名におう 春の景色かな

## 六 伝 説

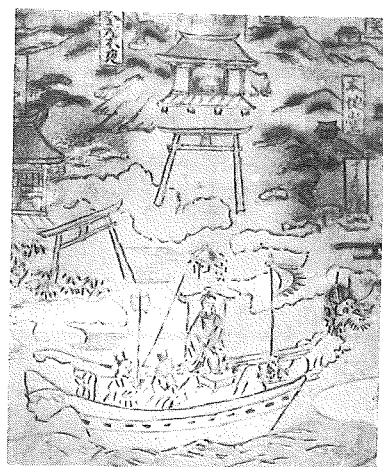
諸富町には神仙思想と結びついた地名(浮盃・寺井) 伝説や動植物(エツ・片葉のアシ)の発生的伝説など特色のある伝説を伝承している。

なお、民話については佐賀県立佐賀東高等学校郷土研究部が町内全域にわたって採集された『諸富の民話』(昭和五十四年三月発行)を参照願いたい。

### 1 徐 福 渡 来

佐賀県立博物館に畳一畳ほどの『金立神社縁起図』が保管されている。『徐福渡海縁起図』とも呼ばれ、下段に船四隻に乗った徐福一行が浮盃江に上陸しようとする様子が鮮やかに描かれている。

約二千二百年前、中国統一の偉業をなしたげた秦の始皇帝は栄華の日々を送っていたが、自分が年をとることと死に近



徐福上陸の図